

## 「心エコー図法のNew Trend」

竹中 克<sup>1</sup> 山本 一博<sup>2</sup>

Katsu TAKENAKA, MD, FJCC<sup>1</sup>, Kazuhiro YAMAMOTO, MD, FJCC<sup>2</sup>

<sup>1</sup>東京大学医学部附属病院検査部, <sup>2</sup>鳥取大学医学部病態情報内科学

心エコー図検査では、二次元での形態評価とドプラ法による流れの評価、そこから得られる指標を用いた心機能・血行動態評価が行われてきた。近年は画像の三次元構築のリアルタイム化、あるいは組織ドプラ法、スペクトルトラッキング法などを用いた新たな解析と情報収集が可能となり臨床応用されている。一方でこれら新しい解析方法に基づく情報のみならず、旧来からの心エコー図法を用いて安静時、あるいは種々の負荷時に新たな情報を取得する試みも行われている。いずれの試みも、これまで評価できなかったこと・評価されてこなかったことを明らかにして患者の病態把握をより深化させ、診断・重症度判定・治療方針決定に寄与している、あるいは寄与することが期待されている。ただし、新手法がすべての面で旧手法を凌ぐとは限らず、どのような検査手法、解析方法であれ限界があり、その限界を知らずして用いることはメリットの半減につながる。

本パネルディスカッションでは、これら新しい心エコー図法の臨床現場における活用に関する最新の知見や試み、あるいは新たな方向性について、肥大心の病態把握、拡張不全や収縮不全における治療効果判定や重症度判定、虚血評価をテーマにご発表いただいた。いずれの発表も機能評価を通じた病態の把握を目指したものであったことから、その生理学的意義、観察される現象のメカニズム、従来からの報告との類似点・相違点など、多くの興味ある話題を提供する内容であった。このたびの発表で紹介された内容は、今後さらに進化を遂げ、将来の臨床現場におけるルーチン評価項目となりうる可能性を秘めたものばかりであり、今後の循環器診療の向上に寄与すると思われる。